



四割が外来種に！ミャンマーの古代湖インレー湖で一世紀ぶりに魚類相調査 標本の3Dモデルもオンラインで公開

九州大学持続可能な社会を拓く決断科学センターの鹿野雄一准教授らは、京都大学、カセサート大学（タイ）、ミャンマー森林局、タウンジー大学（ミャンマー）、山階鳥類研究所と共同で調査研究を行い、ミャンマーの古代湖であるインレー湖の淡水魚類相を明らかにしました。イギリス人のアナンデル博士が1918年に調査報告して以来の総合調査となります。

インレー湖は琵琶湖と同様、地史的に古くから存続する世界でも数少ない古代湖です。古代湖は一般に、その地域だけに生息する固有種が進化・生息するため、生物学的にも貴重な自然環境です。鹿野准教授らは2014年から2016年にかけて、インレー湖とその周辺の68地点で調査を行い、19科49種の淡水魚の野外での生息を確認しました。このうち17種はインレー湖以外から持ち込まれた外来種・移入種でした。確認した在来の28種のうち、13種は固有種でした。一方、アナンデル博士が発見・報告していない未記載と思われる種も数種確認し、今後、同チームで新種として記載する予定です。なお、本調査による分布データ (<http://ffish.asia/INLE2016>) や標本の3Dモデル (<http://ffish.asia/INLE2016-3D>) はオンラインで公開されています。

近年のミャンマーの民主化・資本主義化にともない、インレー湖周辺では土地開発や水質汚染など、急激な環境変化が懸念されています。インレー湖はミャンマーを代表する観光地であり、本研究がその生態系保全や観光促進に役立てられていくことが期待されます。

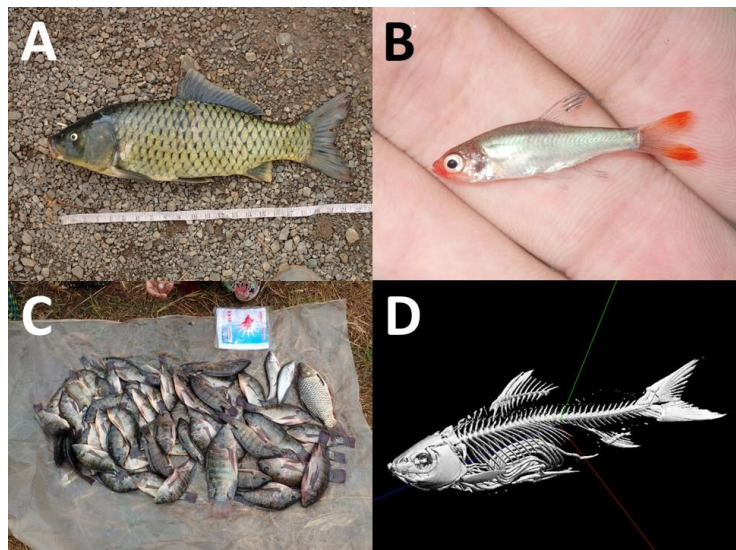
本研究成果は、11月9日（水）付けの国際誌『Biodiversity Data Journal』にオンライン掲載されました。

研究者からひとこと：

近年は民主化にともない経済発展が加速するミャンマーですが、現地でもその勢いを肌で感じました。インレー湖の美しい景観とともに、目には見えない水中の生態系にもぜひ着目し、持続可能な観光資源利用が推進されることを期待します。



現地で標本作製をする研究メンバー



(参考図) インレーの魚たち

A：いわゆる「古代コイ」、鱗が大きいのが特徴。

B：熱帯魚としても人気のサウブワ。

C：市場に並ぶ外来魚ティラピア。

D：標本の3Dモデル。

【お問い合わせ】 持続可能な社会のための決断科学センター 准教授 鹿野雄一

電話：092-802-3419 FAX:092-802-3438

Mail: kano@species.jp